

令和元年5月13日、地域担当職員辞令交付式の際に、職員に対して市長が講話を行いました。その一部を紹介します。

※地域担当職員とは、市民主体のまちづくりを進めていく上で、地域の方々と対等なパートナーとして地域の課題を解決するための取組を円滑に進めるための市職員です。

## 「面倒でも、ぶつかりあっても」

まず初めに、2050年に向かって、長久手市がこれから迎える3つの問題（大規模災害、人口減少、超高齢化）について、もう一度みんなで考えてほしいと思います。東海地方にも大きな影響を与えると予想される大地震は、30年以内に80%の確率で発生すると予測されています。今は若者のまちである長久手市も2050年には、高齢者の数は現在の倍近い2万人になり、高齢化率は3割を超えて、超高齢化の時代を迎えるでしょう。人口減少の問題においても、2050年には日本全体で今より3,000万人減ると予測されています。これらの3つの問題に対して、行政だけの対応は不可能です。例えば地震が起きて火災が発生したとき、消防だけでは3カ所目の火を消していくことはできません。高齢化が進んで認知症による徘徊者増えたとき、行政だけでは探せないし、人口減少が進めば介護保険の働き手がいなくなります。地域の人たちで、協力して対応してもらう必要があるのです。しかしながら、長久手市は今、一部の地域を除いて、隣近所に誰が住んでいるのかもわからない、赤の他人村になってしまっています。やがて迎えるこれらの3つの問題に対応するためにも、今のうちから市民どうしのつながりをつくる必要があるのです。

これからの時代、地域の困り事は、可能限り地域で解決していただく事が必要になるでしょう。どんな些細なことでもいいのです。だからこそ、市を6つの小学校区に分けて、小学校区単位での取組を始めています。地域担当職員は、それぞれの地域を担当して、話し合いに参加してもらいます。地域に出て、地域の困り事に時間をかけて、しっかり耳を傾けてください。しかし、職員は自分の担当している地区のことだけを考える縦割りの発想になってはいけません。地域と市役所をつなぐだけでなく、地域どうしのつながりにも目を向けてください。

今の時代、行政が地域に対して「こうしていく」と押しつけるやり方はふさわしくありません。みんなで協力して作り上げるからこそ意味があるのです。時間が無いとき、一人ひとりの意見を聞くことは、わずらわしく感じるかもしれません。しかしそういう話し合いが大切なのです。大勢で話し合いをしているとき、うまく進んでいると思っているときでも、その中には口に出さないだけで、「もっとこうしたほうが良いと思うのになあ。」と思っている人もいるかもしれません。面倒でも、喧嘩をしても、

みんなで前に進まなければならないのです。

今の世界は、SDGs（Sustainable Development Goals: 持続可能な開発目標）という国際目標を持ち、17のゴールと169のターゲットを基に、「地球上の誰一人として取り残さない」ことを誓っています。これは、長久手市のまちづくりの考えと同じです。遠回りをすることで、一人ひとりに役割が生まれ、市民の誰一人として見捨てることなくまちづくりをしていく必要があるのです。

これまでの日本社会の考え方では、一つの目標を定めたら、そこに向かって最短ルートでたどり着く方法を考えることが良いとされてきました。そういった考えを持っている人と一緒に何かをする時は、ぶつかり合い、理解を得られないこともあるでしょう。しかし、そんなときほど、話し合いを続けていくしかないのです。思うようにならないことや煩わしいことを一緒に経験してこそ、つながりはより一層深くなり、支え合う土壌ができていくのです。

これから地域担当職員として働いていくと、悩むことや苦しいこともあると思います。地域で問題解決を目指すことは、時間がかかり、失敗や遠回りもあるかもしれませんが、しかし、一人ひとりのことを考え、みんなで話し合っていくことを大切にして、頑張ってください。

～市長の話を聞いて～

話を聞いていて、私自身でも、会議中に話が戻ったり、それたりすると、「今その話に関係ないのになあ」と思ってしまうことがあると感じました。もちろん時間をかけずに速やかに決定しなければいけないこともあるとは思いますが、幅広く人の意見を受け入れられる気持ちを常に持っていたいと思いました。今年度から、私も地域担当職員として地域のために新たに働く機会をいただきました。地域の問題解決、つながりづくりの一助になれるよう努力したいと思います。